

溪核



No. 13



溪棧

No. 13

一つの峠は、足を踏み入るだけ見れば、や
がて無しみよりキ艶しきの方が大きくなつ
て来る。併し此の苦しみを踏み込んでやへと
「う」と、又乗しきがあるとや喜ぶるかも知
れぬ。此の修業の期間は随分長くからり
しかも山登りとは体力が大事な要素をもじ
てるので、之を突き抜けて次の原地へ進
むのはなかなか難かしいものである。

一つの山を登り終え、元氣振り返つて
見て、實に胸のすくよつとすつきついた山
登りだったと想うよつて、山登つたやつて
見たい。こんなことを想ふよつこいつ
た時が、修業の初まりである。

—浦松 佐美太郎—
(たつた一人の日)



渓稿 No. 13 目次



- 勤労者の登山 柿沼 博 (1)
 □隨想□ 秋山の愉しさ 辻 勝四郎 (5)

山行報告

- 晩秋の後立山 —鹿島槍から五竜— 長井 宏子 (2)
 □ 三月の鹿島槍 —赤岩尾根— 辻 勝四郎 (4)
 □ 谷川岳一、倉二、沢石俣 篠原 健二 (10)
 □ 朝日連峯・出羽三山縦走 山縣 昌彦 (11)
 □ 冬の奥秩父 —金峰・国師— 小泉 克弥 (15)
 □ 晩秋の穂高 山縣 昌彦 (17)

隨想

北岳隨想



- 霧の中の北岳 辻 勝四郎 (6)
 北岳の想い出 菅野 達也 (7)
 北岳のこと 山縣 昌彦 (8)
 北岳隨想 柿沼 博 (9)

冬山

- | | |
|-----------------|---------------|
| 会員名簿 (20) | 云則 (19) |
| 装備一覧 (21) | |
| 編集後記 (22) | |

労働者の登山

—柳沼博一—

山へ行きたいけれど金がない、暇がない、やつと暇がとれたが毎日忙がしい勤めで疲れてしまって登山といつはけし、運動にはからだがまいつてしまふ。これでも山へ登りたいというのの要求に勤かされて困難な条件をのり越えて山へ登ると、時には事故を起すことがある。するとその非難は当然のことながらすべてその人にかゝつて来る。こんな苦勞が我々労働者が山へ登るうとする場合につきまとつています。

実際、学生時代には山が好きでよく山へ行つたが貧乏してから殆んど山へい行くなつたといつた人がたくさんいました。貧乏した当座は仕事にならず、ならば仕事がないから、そのうち仕事になれ、山へいける条件も出来るだろうと思つてゐるが、勤めになれて山へいける時間と金がうみ出せるのは運がいいんで多くは向時になつてやだつて、それから家業でも守つと生活に追われて、

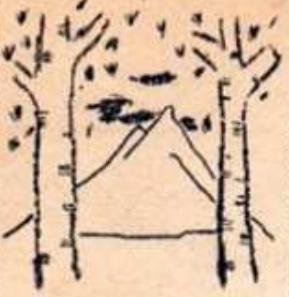
それを山へいけなくなる。されば、我々労働者は困難な状態で生活をなします。

それでも本当に山が好きで、山の良さを体験した人々は何とかして山へいきた、と思い、えい、ポケットマネを出し合つて接觸品を購入したり、時間を最大限に利用し研究したり一所県命に努力をします。

こんな努力の結果みんなで創り出した山行は本当に良いものです。これはじマラヤではなく小さな我々の山です、計画から終り今まで立派なものにしたいと思います。

そしていつか、じマラヤをみんなのものにしましよう。





晚秋の後立山

鹿島槍より五竜岳

期日 36年10月27日～10月31日

Mem L. 辻勝四郎

篠原健二、松井祥

長井宏子・外一人

長井宏子

10月27日 一十二時三五分新宿発
10月28日 雨
バスの始発まで向がれるので、時間も様ぐたの小雨の中を天町より大谷原まで車をとばす。ここで朝食。松井さんが車の中で気分がわるくなり少々調子が悪そうである。川は土色の木がすぐ近くで流れであり、何回か流れを渡るが向う側の登山道にはさうしても渡り付けない。流れに沿つて登り、疲れこなぬ場所を探すが見付からない。雨がひびく。仕方がないのと、しばらく雨の林子を見るため休むことにする。ツエルトをかぶつて雨やどり。行くか、戻るか迷う。まだ時間もあることだし西俣の出合まではまだ行つてみることにしこ出発。ヤブーモミをせつられて危険を渡り、やつと登山道に出る。

登つたり、下つたりで乗な道はない。相安の小雨の中を西俣の出合に着く。テントが次の雨に一張り、ツエルトバニ、ニ張りばかり。流れが急で要わりやすく、どうしても対岸に渡れぬため待機していると去る。雨足も強くて此方にテントを張ることにする。

10月29日 くもり
夜とおしの雨で、テントの両端の入はシユラーフがびつしょりとねれる。朝食をすませたが笠模様は阿とも見えない。明るくなつて虹が出たりするが相安らつの小雨に着く。

10月30日 くもり
たるんでも仕方がないといつてみよつとテントを撤収する。何時もこのこと乍り撤収とはろまり楽しい仕事ではない。どうしてもうこれこすうテントの中。汚れたままぱらぱらになつている食器、雨にぬれて重そうなテント。一直到千穂平までは意外に早かつたもので、すぐに目の前の砂利を崩して流れを度こしまう。下

づたの上が思の外長い。天候は依然としてわるく、霧が深い。昨年歩いたのに全然覚えていないのは、ひどく苦しかつせいであろう。ジグザクの岩壁を登り、平原の小径を石にまわり込むと、やつと「冷え出し」である。

高千穂平までは意外に早かつたが、その上が思の外長い。天候は依然としてわるく、霧が深い。昨年歩いたのに全然覚えていないのは、ひどく苦しかつせいであろう。ジグザクの岩壁を登り、平原の小径を石にまわり込むと、やつと「冷え出し」である。

黒部側からの物すごい、強風に体を震ふ。しかし、それでも対岸に渡れぬため待機していると去る。雨足も強くて此方にテントを張ることにする。

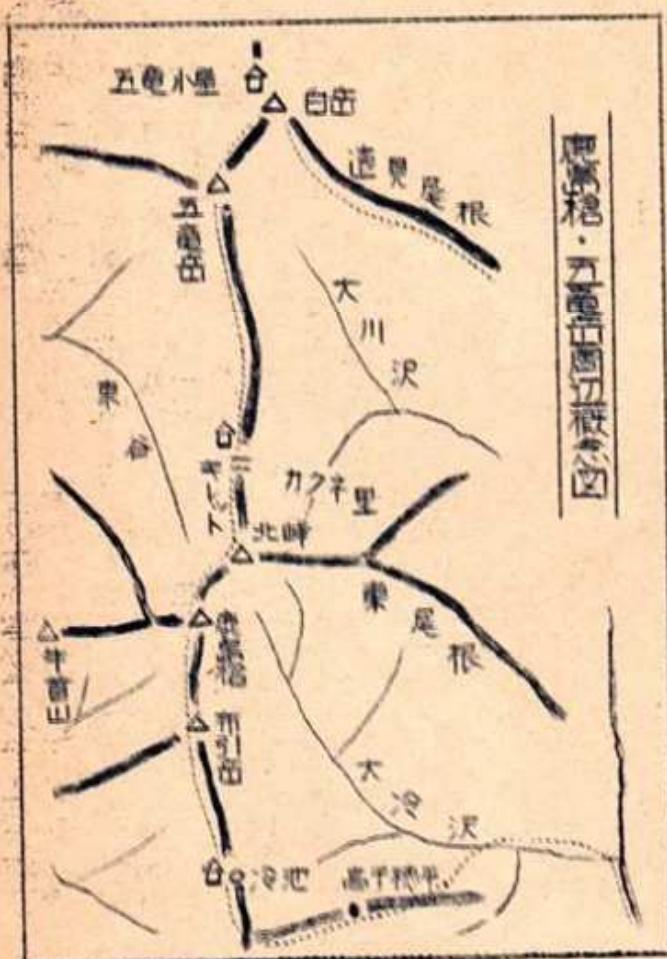
金黄パッキンスを経て、渡れることはできないのである。

着替えたが全体に湿っぽく

おがわるい。斬が豊國ひのじ火を切る。松井さんは愚知とも引いたのだろうか、ふるえながらシユラーフにもぐり込んでしまつた。船を出したよつた。小舟には他には二バーティ、二十人あまりの乗組が、いた。

六類を全部身につけてシユラーフにへるが、ふるえが止まつた。何時までたつても寝れなく、借りて来に此のシユラーフは夏田のものばかりだろう。それでも、くわうトイレードルだろうか……。明け方がまく延びなくなつて、起きて

ラジュースを焚いてもう。
10月30日 くもり、のち晴
朝焼け。五重へ向つたものか
どうか。折角來たのにから鹿島宿
の横上まで、と出発。



ある。雪は全くなく、待つて未だ
ヒツアルも無用の長物。
どうも松井さんの様子がおかし
い。ベースのあそびはずの私がト
ツアなのに、達さんだけしか私の
後についてこないのだ。日向ボッ
コキしながら二〇分うかく皆の追
い轍くのを待つ。
やがて松井さんの奥合が本当に
わるくなつて来た。ひどく水をの
みたがる。「ここにねたいしとい
う。でも、ふつつきながらもお合
い卓い足取りで立つて行った。

五重田の娘。一三七七世のバーティキヤ商店にアーヴィ出でて、五重田三波につく娘、娘に空腹が氣にならしたが、小屋へ食いこむオーフカ、すぐ出来。陽が西に傾いて宿前町にアロッケンが見えた。

下り街でもあり、氣がゆるんで足元からくっして来た。リンゴが食べたいとした。ほらながつた。もうつとも昨日食べてしまつてもう無いはずである。五重田小屋がガスの間から時々見之かくれした。

小星の戸は開いて、ア、横のト
タンたはがして出入りをしていた
。小星に落着いた時は更分がわ
るくなつてしまつて、もう食欲も
なかつた。松井さんは、くすりを
飲んでねこいた。カゼと頭が痛む
と言う。

10月31日 晴 らわにわか雨
山で三泊した為、一日予定が
伸びこしまつた。下る日になつて
初めて朝から晴れて、水場で
顎を洗い、何日ぶりかサツバリ
する。

遠慮奉根を下る。途中、池ノ
川でも昨日のコースをゆくより遡
りる。二、三の丘の丘陵は豪快な氣
山である。御宿船の北壁、カク不
里モ良く見之。

一の往モ二度目、途中かづまに
雨になる。小道東につく奥には因
キ上つて、すばらしい虹が出了。
ドロンゴ往に両回も足きこうれ、
月斜さついたりして道東小屋へ憩
ぐ。ちうど一の木屋にも街入はぬ
まい。

紅葉つて、こうに神城の町が見え
る。あとはひんびりと明るい半
みじの樹林の中を車へん下ろしては
である。

三月の鹿島槍

—赤岩尾根—

辻勝四郎

△3月17日▽ 小雪
朝7時、大町より一番のバスで漂汲へ。大町でふり始めた雪は相変わらずやまない。バスで一誂だつた奥西山岳会バークイより一足先に出発。積雪およそ二〇センチ。馬入りが径を敷之ながら、我々を追い抜いていく。鹿島部落までは、平坦な僅きらくる雪道だ。部落で小休憩。鹿島槍から五電まで従走の計画なので二人ではさすがにけんづも重い。道の両側に雪垂木。び秋く・時川・木の枝がはねて音もなく雪の花が散る。去年の十月、このあたりはあさやかな紅葉だった――。

大曾根で寒さにふるえながら登坂。このあたり一面の雪の原である。うまくいつたう高千穂平までという予定だったが、雪のためにトレースが判然とせず、しかも先行バークイにつけられて東尾根を途中まで登るという。ヘマを演じてしまつたので、大渋滞に戻り、赤岩尾根取付より三十分程手前の河原に穴を掘つて、早々にツエルトをかぶつた。一晩中小雪・気温マイナス七度。

△3月18日▽ 小雪
朝7時、大町より一番のバスで漂汲へ。大町でふり始めた雪は相変わらずやまない。バスで一誂だつた奥西山岳会バークイより一足先に出発。積雪およそ二〇センチ。馬入りが径を敷之ながら、我々を追い抜いていく。鹿島部落までは、平坦な僅きらくる雪道だ。部落で小休憩。鹿島槍から五電まで従走の計画なので二人ではさすがにけんづも重い。道の両側に雪垂木。び秋く・時川・木の枝がはねて音もなく雪の花が散る。去年の十月、このあたりはあさやかな紅葉だった――。

△3月19日▽ 晴
二時半起床。もぐらのようになれる。空。既にした月が小曾根の上に掛つている。稚魚で朝食。松本で来り換えの折に、買つたばかりのテルモズをわつてしまつたので、カラになつたウイスキーの瓶にミルクをつめ、急造のサフサツフを貯蔵して、火月が主役に次じ四時半 フライトを灯して出発する。

赤岩尾根取付五時、こゝに到着

△3月19日▽ 晴
高千穂平には二、三の大暮が張られている。このあたりルートはほとんど変徑でおし。一寸どりトを外れると、すっぽりと懶松の中にはまり立つものでヤツカイだ。最後の主役に出るところは、乗越峰・吊尾根・北峰そして東尾根と雪の山稜を続いている。

高千穂平には二、三の大暮が張られている。このあたりルートはほとんど変徑でおし。一寸どりトを外れると、すっぽりと懶松の中にはまり立つものでヤツカイだ。最後の主役に出るところは、乗越峰・吊尾根・北峰そして東尾根と雪の山稜を続いている。

鞍部から宿舎帯は再びラツセル

Moto
森原健二
江藤四郎

△3月16日▽ 雪の晴

朝靄が雪煙の中にかすんで見える
、冷小屋は雪の上にわざかに屋根
の一部をのせさせている。横手の
窓から中に入つて氷板をとる。
十時、身軽になつて小屋を出
発。こからはもう完全なアイゼン
カ領域である。布引岳の登りに
かかるあたりからまどもに穴風を
受けるようになり、頬を信州側に
向けたまゝ、一歩／＼アイゼンに
力を入れて登る。
疲れてものこの強風の中ではとて
も休めたものではない。布引を登
りつめたところで一休みと腰を下
すと、たちまちものすごい雪煙が
流れ。あたふたと腰を上げる
・布引からしばらくは平坦にあり
・やがて最後の南峰の急な登り。
アイゼンを効かせ、ピツケルのジ
ックを打ち込んではうようにして
頂上に出る。十二時。

大きなケルンの陰に月をかけて
小休憩。五竜ハウ松にかけての
枝葉が雪煙の中にかすんで見える
。三月とは言えかなりの登山者で
中には五竜から縦走して来た男
もしないので、たゞちに下山。や
ましい、バーインもある。
风が強くさつぱり休んでいる所
も小屋でサックを持ち、赤岩尾根を

窓から中に入つて氷板をとる。
十時、身軽になつて小屋を出
発。こからはもう完全なアイゼン
カ領域である。布引岳の登りに
かかるあたりからまどもに穴風を
受けるようになり、頬を信州側に
向けたまゝ、一歩／＼アイゼンに
力を入れて登る。

かゝるあたりからまどもに穴風を
受けようになり、頬を信州側に
向けたまゝ、一歩／＼アイゼンに
力を入れて登る。
疲れてものこの強風の中ではとて
も休めたものではない。布引を登
りつめたところで一休みと腰を下
すと、たちまちものすごい雪煙が
流れ。あたふたと腰を上げる
・布引からしばらくは平坦にあり
・やがて最後の南峰の急な登り。
アイゼンを効かせ、ピツケルのジ
ックを打ち込んではうようにして
頂上に出る。十二時。

九月の末の方、急に二、三日冷
え込んだ日が続くようになると、
山々は慣のめたりから紅に染る。
日中は未だ夏の名

秋山の愉しさ

よう。自然と人生をしんみりと肌
に感じさせる季節——独特な味い
と愉しさを感じさせるのも、この
時期の山茶である。

九月の末の方、急に二、三日冷
え込んだ日が続くようになると、
山々は慣のめたりから紅に染る。
日中は未だ夏の名

残りを感じさせる

が、麓では一斉に

ススキが穂をひろ

けて「あゝ秋が来たな」と思ふ。

十月一日はもう一帯に

あざやかに黄んで、紅葉は次第に

中腹からふもとへと降りて来る。

叢の中では、あけびが紫色に熟し

て口を開け、山柿がちらほらと眼

につくようになると、足元の葉が

けから音が頬を出す。なみこや椎

を取りに無くなつて鬼の道草

はない。

秋の山は、愉しさの中に寂し

さがある。(立勝四郎)

こうがるよう下る。気温の上昇
で尾根の両側には小さなナタレの
跡がいくつも見られ、登りには、
キヨ／＼と小気味よくキシンだ
雪も、今はタンゴになつて仕事が
悪い。三時半酉六帰着、早々に荷

物を疊んで、今夜は大分次出合の
丸山小屋泊りとする。
鹿島川を渡つて、黒沢高原に登
る。秋の黒沢高原の良さは東觀君

を喰うの七二の時期だ。

紅葉と霧と木と、そして雨でさ

え秋の山では敵を赤える。ガサ

ガサと紅葉がなる。乳白色の霧が

残葉にもかじした落葉松の林を流

れ、時折澄んだ空氣をついて、踏

みしたかれた朽木が「ボキン」と

乾いた音を立てる。喘ぎ疲れて往

路に横になると、頭の上は眩しい

煙には桟の木が枝もたわに実

をつけて、燃えるような紅葉の

香りで、雪を散した山々が益々

高さを加えて来る。

鹿の雨が山では雪と變り、し

つとりと漂れた落葉松の林の道

はやがて雪の中に姿を消す。枝

親では霧水が風に吹かれて青空

の中にキラ／＼と乱舞しても、

立枯れの広瀬な裾野では、逆光

で看びたススキが白く次第に幻影

的に浮んで見える。湖面が殘照

に映しく光る。誰かとおどけて

喉鳴つたつけ。「太陽がいつば

い。」

秋の山は、愉しさの中に寂し

さがある。(立勝四郎)

北岳隨想

霧の中の北岳

辻勝四郎

ない。

仙人岳は、北岳を眺めるには豊

まれた山だ。早朝仙人の石室を発
つて頂上に立つと、北岳の大きさ
シルエットの左肩に、富士がこれ
も黒々と浮んで見えて、さながら
画雄相たゞすむと立つた風情であ
る。馬鹿尾根を両俣への下降段あ

うつ巣とした樹林を抜けて、平
坦な北沢峠をわざかに下ると、そこ
から北岳が見える。山ありい

の木立に伏りうれて、いたゞきの一
角しか姿を現させてはいないの
だが、定元のおぼつかなくなる日
暮れ時に、そこだけがアーベント
ロートに輝いて、る光景には、神
神の庄と云つた神祕的な美しさが
ある。

駒ヶ岳の七天小屋かつ鳥居に近
かづく頃、左手に駒ヶ岳のよつな南
アルの内懐が見えて来る。幾重にも
積く山波の中では、北岳も大きな
波峰の一つに成り下るが、さすがに
はその一劃の形成を誇ることにな

る。

赤蓮天を登り詣めて広河原峠を
越える——それは北岳への最短路

である。そのつめ上げの広河原峠
では北岳も定かではないが、早川
星根を南下して白鳳峠をすぎる頃
から、右手に終始北岳が顔を出す
。「あれが大横沢、あれが草すべ
り……」休息のたびに、僕等は周

辺の沢や尾根を指呼したが、一般
たりまで下ると、北岳は大きく鳥
を張つて正面を向き泰然自若、ま
さに王者の威容十分と云つたどこ
うだ。だか來城から両俣に下り始
めると、もう北岳は見えなくなる。
どこからでも同じように、北岳

角かつ北岳といつ山を眺めて来た
ことになる。そのくせ僕はたつた
一頃、僕等は良く南アルの北部一

この後も西三度北岳に登ること
はあつたが、それらが何時も陰つ
つた涼い霧の日らしいも立つて、
いずれも頂上にわずかな脛に立
つの乍ら、どうく一度もそのい
たゞきを踏んではいない。

□

ヒマラヤ登山などといふ、大き
こな特殊な山登りをのぞいては、大け
登山の黎明期に入々が抱じていた
ような、山嶺に対する強い憧れや
敬度とは、もう我々には遠いものになつてしまつて、限られた未
開の山や、積雪期の山登りにわす
かにそんな期待を残すだけである
。ケーブルが出来、径が改修され
して危険な處には針金が渡され
、山小屋が改築されたりして、
トからすら比較的容易に頂上に辿
りつくことが出来るようになつて



北岳は頂きが太郎尾根の上にそろりとくわせてねえ。風風方面から見る雄大さとは別なすうじで石のほこうの中にはかにねむつていろいろ指輪を想い起させた。ほこらの中の指輪は人目にふれず何年もねむり続けるにちがいない。そして私は北岳を見るたびに、雨に降り込められた早川尾根小屋や指輪を思いますにちがいない。

"北岳"のこと

山 縣 昌 彦

私の郷里のある甲子益地の真中から四の方を見ると、毎月のようすをとりまく山を今に向うに東京に生れ育った私は、小・中学校時代の休暇に時々田舎の親類に遊びに行くうちに、いつしかそぞろい山々に子供心にも一種の畏敬の念をいたいたものである。並



□ 始めて北岳の姿を目の前にしたのは昭和30年5月、K君と二人で風風に立つたときである。このときは正崎から歩いて甘利山↓

□ その夏、現役の部員を連れて北岳を登ったが、広河原に入るのにどつた赤ナギ沢の登りでえらい疲れで、白根という怖うし、山が北岳であり、益地の真中かうのである。白い山なみが北岳、何、農村の白華三山だと、うことを知つたのはすつと後のことである。

□ どうぞ、北岳は頂きが太郎尾根の上にそろりとくわせてねえ。風風方面から見る雄大さとは別なすうじで石のほこうの中にはかにねむつていろいろ指輪を想い起させた。ほこらの中の指輪は人目にふれず何年もねむり続けるにちがいない。そして私は北岳を見るたびに、雨に降り込められた早川尾根小屋や指輪を思いますにちがいない。

□ その夏、現役の部員を連れて北岳を登ったが、広河原に入るのにどつた赤ナギ沢の登りでえらい疲れで、白根という怖うし、山が北岳であり、益地の真中かうなのである。白い山なみが北岳、何、農村の白華三山だと、うことを知つたのはすつと後のことである。

□ どうぞ、北岳は頂きが太郎尾根の上にそろりとくわせてねえ。風風方面から見る雄大さとは別なすうじで石のほこうの中にはかにねむつていろいろ指輪を想い起させた。ほこらの中の指輪は人目にふれず何年もねむり続けるにちがいない。そして私は北岳を見るたびに、雨に降り込められた早川尾根小屋や指輪を思いますにちがいない。

□ どうぞ、北岳は頂きが太郎尾根の上にそろりとくわせてねえ。風風方面から見る雄大さとは別なすうじで石のほこうの中にはかにねむつていろいろ指輪を想い起させた。ほこらの中の指輪は人目にふれず何年もねむり続けるにちがいない。そして私は北岳を見るたびに、雨に降り込められた早川尾根小屋や指輪を思いますにちがいない。

なく、さつしりと大地に根を張つた、巨大な意志をもつた大自然の偉大さがあつた。

かくしてとにかく頂上を味うことを得た次には、あらゆるルート、あらゆる季節を通じて登ることが課題となつた。

又年夏は単独でまず荒川・北沢をくつめた。渡歩の怖ろしさほどもかく、もう一日おくれたら例の大台風でこんな目に合つたからではない。二日目によく北岳小屋へボツカリと出でて、たゞ一人残つていた小屋笛から白日の来襲を聞き、月雨の中を吊尾根を駆けるように下り、西山道東から甲斐入りまで土砂崩れでバスが不通になつた道を歩かせられた辛さは忘られない。

35年の正月は仙丈、朝をやつたついでに兩限から石保を登ろうと計画したが果らず、夏も荒川本谷の予定がこれも計画だけに終り、この年は北岳を踏まずにつつもりでいたのが又出来なくなつてしまつた。

最後に北岳に対して私の抱いて

いる「計画」と「夢」を記してみよう。

まず積雪期に吊尾根から登る。

次は雨天から左・右俣をつめる。

夏には荒川本谷、細沢をつる三千

米近くに天幕を置いて北岳を往復

し一日ゆっくりといるね。でもす

る。バットレスは食宿も勤くが若

い人はにまかせることにしよう。

夢としては、野呂川北沢から北岳

へのルートを開くこと。地図を見

ればよく分るとおり、小太郎尾根

は北岳から北進して小太郎山ニセ

二五のピークから西北直角に西に

折れ、野呂川に向つてゆるく下つ

て、北岳のピラミッドのよつな尖

るよう下り、西山道東から甲斐

入りまで土砂崩れでバスが不通

になつた道を歩かせられた辛さは

忘れない。

河原立自動車が入るという。そう

河原立自動車が入るという。そ

うに入つたのはこのときがはじの

り翌年の夏である。この時は南ア

フリーランドのようだ。

私は、こからはじめて北岳を見

た。それまでに北アルプスの山は

二五のピークから西北直角に西に

折れ、野呂川に向つてゆるく下つ

て、北岳のピラミッドのよつな尖

るよう下り、西山道東から甲斐

入りまで土砂崩れでバスが不通

になつた道を歩かせられた辛さは

八丁坂を登りつめて北天峰の鳥居をくぐり少しこと「北岳が見え

る」という古ほけた小さな札

がある。ここから御杯の間を通し

て、北岳のピラミッドのよつな尖

るよう下り、西山道東から甲斐

入りまで土砂崩れでバスが不通

になつた道を歩かせられた辛さは

忘れない。

35年の正月は仙丈、朝をやつた

ついでに兩限から石保を登ろうと

計画したが果らず、夏も荒川本谷

の予定がこれも計画だけに終り、

この年は北岳を踏まずにつつもりで

いた。36年3月、現役を又鳳凰

に含宿させた帰途、予寒根から登

つてしまつた。

最後に北岳に対して私の抱いて

北岳隨想

柿沼 博

焼けして北岳を包んでしまつてい
た。ものすごい光景に見入つてい
る。南アルプスのカムカデと自称す
る手毛いた小屋のおやじさんが「

北岳はこわい山でやねえ」と、いろ

いろ音ばなしをしてくれた。一方

時は北岳に登ることが出来ず、時

時吹きつける雨の中を赤ナギ沢を

下つた。

北岳に登ることが出来たのはそ

の翌年の夏である。この時は南ア

フリーランドのようだ。

私は、こからはじめて北岳を見

た。それまでに北アルプスの山は

二五のピークから西北直角に西に

折れ、野呂川に向つてゆるく下つ

て、北岳のピラミッドのよつな尖

るよう下り、西山道東から甲斐

入りまで土砂崩れでバスが不通

になつた道を歩かせられた辛さは

忘れない。

35年の正月は仙丈、朝をやつた

ついでに兩限から石保を登ろうと

計画したが果らず、夏も荒川本谷

の予定がこれも計画だけに終り、

この年は北岳を踏まずにつつもりで

いた。36年3月、現役を又鳳凰

に含宿させた帰途、予寒根から登

つてしまつた。

最後に北岳に対して私の抱いて

いる「計画」と「夢」を記してみ

よう。

まず積雪期に吊尾根から登る。

次は雨天から左・右俣をつめる。

夏には荒川本谷、細沢をつる三千

米近くに天幕を置いて北岳を往復

し一日ゆっくりといるね。でもす

る。バットレスは食宿も勤くが若

い人はにまかせることにしよう。

夢としては、野呂川北沢から北岳

へのルートを開くこと。地図を見

ればよく分るとおり、小太郎尾根

アリヤカ空港の中から植樹を見た。運転した西、女性の為に誰かわざ／＼この山の頂上まで持つて来たものである。仲間がごつともとの岩かけに戻した時、ふつと何か口マンナンツクなものも心の中に痛いた。下りは吊尾根を下つたが、ハニカムのやせ尾根にはコマクサが咲いていて、ぶり返つて仰ぐ原上はガスカベールに包まれ、巨大なペントレスの苔壁が神秘的な谷ほうに見えた。

その後、西におられた仙丈岳や朝ケ岳に登り度か北岳と対面したが、ピーフの先端より天空に向つて雪峰を上げていう姿、あるいは夕陽にバラ色に輝く美しい海を見て、冬の北岳に登つてみたいと思つたがついに登つていい年も野岳より十五百木の標高差を一気にのし上る姿に、その頂上には拍輪ノリが静かに眠つていて、もう等と想いにつけりながら、貴様の私には登るよりモロシする。山本のかも知れないと思つて、いるうちに土合駅についてしまつた。

大宮駅で入口を二・三ヶ所とびまわつてやつと乗り込むことができた。お盆休みも重なつて周囲の駅客もいつこうに降りる気配もなく、こうなつたう早いが勝ちと少しばかりの隙間にムリヤリ腰を下してしまつた。手でもなく神経痛の痛みをどるには、こうする以外に手はないのである。轟き声を下してしまつた。耳でもなく、神経痛つとくして、今まで今まで同じ傾斜で統一するスラブを見え下すとなかへ高度感が荔付け、辻さんと中川君はゴロツと横になると寝てしまつた。一時

ふらひてがつかりしたことは一度もない。いつも「ほ？」とするのである。生れつじての癪病のせいかも知れない。今日の予定——ノルートである。兩が降つたら温風にでもへつてのんびりしよう」と出掛けに言つた辻さんの言葉をあてにする。それでもねじい自をむりやり開ぎながら真暗な新道をマチガ沢の出口まで行き、ここでしばらく夜明けを待ちながら天気の様子をみることにした。

二ノ沢の雪迷でさかんに雪上訓練をしてくる登山者にまわり急な雪峰を登つて左手の岩に取り付く。辻立岩の大オーバーハンプに二人の登山者がぶら下つているのが見える。階段状のスラブを登り、小さなリヅ子を越えて左俣から三

時。時間短縮でさかんに雪上訓練をしてくる登山者にまわり急な雪峰を登つて左手の岩に取り付く。辻立岩の大オーバーハンプに二人の登山者がぶら下つているのが見える。階段状のスラブを登り、小さなリヅ子を越えて左俣から三

つ俣へ下る。

右俣は出口のせまい岩場を少し登るとあとは一帯に広げた快適なスラブである。右俣は大したこともないなど思ひながらも、すつと下まで同じ傾斜で統一するスラブを見下すとなかへ高度感が荔付け、辻さんと中川君はゴロツと横になると寝てしまつた。二人は相あつて寝ていて、焚火をはじめ、しばらくしてやつと入心地ついた頃、二人が起き出してきた。

雨が降つてはよいが空はガスつていて寒氣は良くなり、一と思つたのは間違い。半灰岩に陽が当つて、るではないか。苏るうちに土合駅についてしまつたが、あまりのんびり寝すぎた。空を見て、も空らしいものは一つもよく天気はわるそうである。いつたのとおり西黒尾根を下つた。

谷川岳一ノ倉沢

二ノ沢右俣

藤原健二

八日／ 36年6月4日

ヘメンバー／ 辻 勝四郎・

中川隆史・藤原健二・

朝日連峰縱走
出羽三山



山縣昌彥

加藤文太郎と、うき山家の記録を
読んで驚くこと一つは、彼は
中岳山岳あたりに出かけて来るこ
と、一つの山群だけ登つて終りにせ
か、途中下車をしたりして沿線の
山々を実際に見て精神的にかせいで
くることである。

我々は一つの山群をやつて下つ
てくると、それでもう精神的にも

りてとつた休暇を最大限に利用しようとする意図があつたのではなかろうかと推測する。

我々二人が今回、飯豊一朝日一月山一鳥海山と依張つた計画を立てたのは、高い汽車費を見るべく、効率に疾おつと、つ一一二三またしがないワラリーマン根性のせざる、わざ、と言われるかも知れない。それほどもかくとして、朝日

我々のバスが白瀬に着いたのは十一時。朝日遊覧へ行く他の乗客と別れ、我々は金山沢沿いに鳥取山へと向う。

次を離れると二度でゆっくり盛食となり、鳥取山へと登り始める。と向もなく前記「大公」の連中に追いつく。何しろ百人余もいるといふにこりつた。さうして、どうにものうないので先に抜け出

山東・山東演劇
「期日」
平成2月26日～30日
「メンバー」

では全日本高校登山大会の連中に
ぶつかり、それと雨で予定が一日
遅れ、加藤文太郎ほど力ぼけでもなく
悲しき、馬鹿に遊る時間もなく
さつたのは残念であった。

ようとしたが、これまた行けども
行けども元に続いて、るには両口
。どうく向に狹まりながら馬鹿
山の草原に巻く。

毛利ケ祭を慰めせる不うな事で、花の終つた水芭芋も兜られ、なかなかよい戯である。春宮を始めた假等の間を縫つて、我々は次の木場銀玉水まで行くつもりで先を急ぐ。然し馬鹿山頂まで未だ寅には、かスがかなり濃く行子の小朝日岳は黒い雲に包まれてし手つていた。鳥原山を下り、小朝日の登りにかかる頃にはどうく雨になつた。止じて待す。鞍部の一寸とした平地に幕営。水場はないがボリタンフの水で間に合せ、時々激しくなる雨の中で一晩をすごす。

左次	7.30着
少宮有	8.30着
少白	9.15着
白港	11.00着
↓	
篠原神社	14.00
↓	
小朝日とく 鞍部	15.30

の雨が中を大会の連中がびびりに余りながら通つて行つた。連中は今日、大朝日、百畳烟、孤穴といった御走路上の幕宮地に幕宮、明日下山とのことである。それなら我々は今日は鳥原に戻つて一泊し、明日被走すればもつ彼等に逢わないで済むわけである。といふわけで鳥原に戻り、鳥原神社の中に落ち看いた。神社と言つても勿論神主等居ない、六坪ほどの小さな建物であるが、よく登山者に利用されるらしく、乾パン等が供えられ、天部散りかつてゐる。

一方、美しい夕焼けが鳥原の草木を赤く染めた。

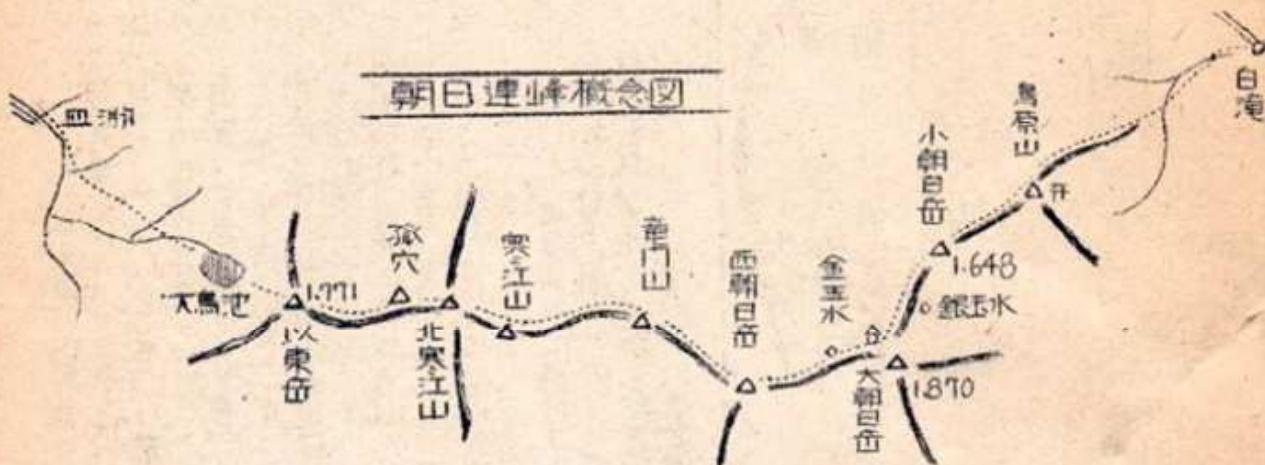
チケラ大ヶ上が金玉水と叫けれる
幕宮だらしく、大公の連中が大勢
今出来しようとしているらしい。
荷を置いて大朝日岳頂上に登る。
さすがに良い眺望、南には祇えて
来た飯豊の山々、北方にはこれか
ら行く月山が良く見える。

再び縦走路にもどり、西朝日面
に向う。日光キス下やイワカガミ
寺の多い坦々たる尾根道であるが
、山全体が湿景的を感じて、尾根
道も泥んこの所が多い。又追い付
いた大会の連中の間に、埼玉の飯
能高校の女子隊もいた。

カラン＼照りの暑さと、单调な
尾根道に少々うんざりしながら、
竜門山・寒江山を越え、朝日連峯
最北端の以東岳の堂々たる山容を
前にする孤穴の水場に着く。まだ
一時、二札かつ以東山原の以東小
屋まで行く時間は十分あるが、ど
うせ明日は一日＼岩美釣り＼をた
のしむだけ、この状況を幕宮地で
ク一夜を楽しむ手はない、此
處に船を落とし昼夜、夕方から烟
中の火を落とし昼夜、夕方から烟
で満月を賞める。

鳥	禿	神社	4.30
↓	東	山頂	5.00
↓	小	朝日岳	6.00
↓	銀	玉水	7.00
↓	大	朝日小屋	7.20
↓	大	朝日面頂上	7.45
↓	西	朝日岳	8.00
↓	竜	門山	9.45
↓	寒	江山	11.00
↓	北	寒江山	12.45
↓	狐	穴	13.00

うちに、パクリときたらしく夢中で揚げた糸の先に銀驕をひるがこしながら二十櫛糸の岩美が上つて来たではないか。され、それから大笑である。こんばんを補えて手をふり回し、又餌をとらむてはとんぼを追うという大奮斗、一時間足らずのうちに、大きいつまいで五匹の戰果を上げ、意氣揚々と引き上げる。事に利し悪火にかこして廻焼きとし、晝飯の御茶となつて文才である。



格別。夕方三人ハ登山者ガ同宿す

孤穴	5.00
↓		
以東岳	6.30
↓		
大島北南岸	7.30
↓		
大島小屋	9.00

未明四時、小屋を出発。表手の駒
林茆を下し、行口は、向むく七ツ
滝沢に沿う下りとなる。何しろバ
スク出るところまで二十七キロ・
されに今日中に月山を登れるどこ
うまで見る予定なので、今日はた
ろんで、いわればピッチをあける。
然しようやく冷水沢まで下つた
と思うと、また茶畠山から発する
尾根まで二百木以上登り、それ
から四瀬まで下りといふ大鳥越
から八十村（実際は十村以上）に
そうだ）はガイドブックにゐる二
時回では一寸無理である。タムの
ある血淵から繁岡の部落まで、ト
ラツクの通車道を元井、繁岡か
らバス終点上田沢迄は矢に八村タ
单調な道が續く、なるほど、いく

ら、岩奥の宝庫でもこう不候で
ほ人が入らないわけである。しかし
平生の心がけ良き我々は、繁岡
へこの途中で引返す小型トラックに
出合ひ、上田沢まで乗せてもらつ
た。但し繁岡へ上田沢向は立山者を
運ぶのが商売だそうで、料金をと
られたことを免めたため申し添えて
おく。

上田沢から鶴岡行きのバスに來
り、途中「落合」という所で下車
。少々食糧を補給し、湯殿山行の
バスに乗り換える。凸凹の山道を
激しくバウンドしてがら車は通坂
七五〇米余の湯殿山ホテル前に着
く。魂消たことには、白衣束に身
を固めた老若男女の信者達が何と
大勢いることか。此の山ではキス
リングのでかいのを育成した姿は
異端である。

車をするのは四角になつたくつしてゐる。

湯殿山神社は沢のほとりにあり、直に此處で沢を渡つて月光坂の急登になる。途中鉄橋や鎖もあり、暑さにはてる。ようやく二軒を登り切ると農業場と呼ばれる小屋掛けに出、一寸先きにある雪渓で一と息つく。

湯殿山神社まで程ではないが、これより月山に向つて相模うアノ白表束ク人達が団体で登つて行く。中にはステテコと半袖シャツで風呂敷包サーフをぶら下げる者もいる。道は確かにしつかりつけられて迷う心配はないが

とにかく一千本近い山である。天候が悪化したら、どちらが心配になる。それにしてモ余り重荷で登るのも気がきかない顔だ。牛首を過ぎて、大きず雲梯を足下に見ながらようやく月山頂上に立つたのは六時。丁度立山の雄山神社のよう、小高くなつた处に作られた月山神社の左手に、鳥海山がタモやク中に薄黒く浮んでいた。マナガにこの時刻には入り姿は見えない。

神社へ参りて見えた。外へ、無理する事なく、追いかねれると聞いて来たので、日ひ暮れぬうちに適当な刈を採り、ねばならない。神社のわきを通り

△7月19日△ 晴
月山でのすがくしき朝を迎える。明日はいまくしい勤めが功るので鳥海山はあきらめ、羽黒山に出て帰ることにする。九合目

から八合目にかけ、約五糠の間に
にまだらかな草原で、立山と同じく
亦蛇ヶ原と呼ばれてゐる。二つ
つかつ月山に登る信者が多く、紹
で大勢の人引張られながら、急
も絶え／＼に登つてくるお祭り
もあり、白夜東とのすれちがいが
又大変である。七合目から通は左
に下り、御杯帯を一時も下れば

大島小屋	4.00
田 湖	7.00
途中アリトラップ	
上田次	9.30
落 合	10.00
	10.20
湯殿山ホテル	11.30
湯殿山神社	13.00
丹山頂上	14.00
丹見ヶ原	15.00

だたう広い稜線を北に進む。あたりは薄暗くなつたが、道は鋪装路の如く石を敷きつめてあるか、夜中でも歩ける道である。暫くで右手に月見ヶ原と呼ばれる臺地があり、雪原のかる处に出て、そこで野喰。やれり、今日はよく下

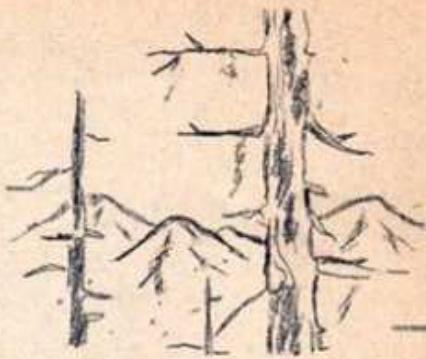
五合目狩場に出る。標高ハハヨメ
ノニ、今までバスが入つてゐる。
万どはバスで羽黒山頂まで運ば
れるだけである。こゝには湯殿山
、月山、羽黒山の三神を祀る羽黒
神社があり、修驗者の蓮湯として
有名である。我々王丁度、ほら回
を吹きながら高下駄に杖をついた
山伏に出会うことが出来た。宝物
殿を見学してから再びバスで鶴岡
へ出る。例の如く最後の廻落し場
所を物色すると、近くに湯野浜と
湯田川と二ヶ所の温泉がある。我々
はバスで湯田川といふ温泉町へ
行く。丁度土用のうし湯宿とかい
う宿でにぎやかで立つたが、長い
お湯で飯豊の湯の平以来の垢を洗
い落とし、久しぶりにこつほりと
した。入浴御休憩料。

かくて十一日にわたる東北の山
のぐりも終つたわけである。

月光ヶ原	5.00
弥陀ヶ原(8合目)	7.00
狩籠(5合目)	8.00
	8.30
羽黒山頂	9.40
神社参詣	10.30
鶴岡	11.50
湯田川	
鶴岡(笄)	17.06
大宮(着)	6.00

一月の奥秩父

—金峰・国師・信州峠—



小泉克弥

（一月12日）
約半年振りでまた山に来た。今
日もたうた一人である。
家に相違することはないだしく
雲の少いこと／＼。宿舎でわす
か五種。あてが外れてがつかりし
たが、本当は幸いなのだろう。
クラストした雪の径を唯一一人黙
黙と歩いた。「どうしてこんな大
きな荷を背負い腰を曲げてあえぎ
あえぎ立る山なんかへ来るのだろう
うじと歩きながら考へた。天気は
あくまでもよく、空は澄みわたって
日が暑いくらいに照りつけている
た。前回来た時と同じく、金山小屋
の前の原っぱを大切るのにひと苦

労した。金山小屋から峰までが、
これまで物笑いになるよくな歩
き方をした。近道をしてやれと
進んだコース、かつて通つた道
とは全く異なり、一直線に移
移を目指してせひて、汗ばみ
ながら、峰をいたいた南アの山々
が美くしうバラ色に輝いた。冬山
ならではの光景にしばし見どれて
いた。

（一月13日）
大日小屋の奥は雪も相当つもつ
ていたが、よくトレースされてい
てもうるよくなことはなかつた。
雪上歩行に慣れたのか、今にも
すべりそうな気がして心理的に大
きな疲れになつて立つたが、分
水閣に立つたが、回りを見回し
て立ち止まつた。一つ手前の峰に立
つて、うるよくなつかず、单独行
の心細さ、石するも左するも心
細いこと限りなし。意を決して
あくまでもいくつも楽しく歩け
た。雲もなく晴れ渡つた世界に、
下のしつかりした道に出で見
た。指道標に早く「瑞牆山莊ま
であと二十分」急がば流れ、
宿見・宿立のハケ岱の峠々、それ

とじつことわざを身にしみてわかつた次第である。そこから三十分
よつ／＼瑞牆山莊に着くことが
できた。雪をいたいた岩がどう
かかった。岩かけに身を置いて板を
食べながら、「元気でゆこうぜ」と
サクフをたゝいた。もう一人ほつろ
の心細さは感じなかつた。

金峰山頂に着いたら、月が強く冷
たかつた。岩かけに身を置いて板を
食べながら、「元気でゆこうぜ」と
サクフをたゝいた。もう一人ほつろ
の心細さは感じなかつた。
金峰からは眺望がよほど速く進
んだ。前にも後にも、もう全く人
は無く、大声で歌をうた、ながら歩
いた。大池小屋まで二時間半であつ
た。小屋の前の百メートルが一番ま
ずつた。明日はこの往復を繰るかと
いた。

（一月13日）
大日小屋の奥は雪も相当つもつ
ていたが、よくトレースされてい
てもうるよくなことはなかつた。
雪上歩行に慣れたのか、今にも
すべりそうな気がして心理的に大
きな疲れになつて立つたが、分
水閣に立つたが、回りを見回し
て立ち止まつた。一つ手前の峰に立
つて、うるよくなつかず、单独行
の心細さ、石するも左するも心
細いこと限りなし。意を決して
あくまでもいくつも楽しく歩け
た。雲もなく晴れ渡つた世界に、
下のしつかりした道に出で見
た。指道標に早く「瑞牆山莊ま
であと二十分」急がば流れ、
宿見・宿立のハケ岱の峠々、それ

11時50分 金峰山 (12時43分)
 13時30分 朝日岳 (14時45分)
 15時10分 朝日峰 (15時30分)
 15時35分 大弛小屋 (16時6分)

一月十四日 雨のち晴
夜明けはどんより曇った空か

の白いル片の詰要で充てた
ストーブにはそれでもまだ燃え残
しが少しあつて、薪を二本はさ
かりくべて火を燃え立てさせ朝食に
した。不安に満ちた朝食を終つた
。パツキンズに手筒取つて、うう
うに、晴れ向がみえて來た。早く
出発したいとはやる心を抑えて小
屋を掃除した。それが終つたらも
う八時近かつた。

二〇分ぐらいで着くたうえで、つた園師岳には、一度四十分か、つた。初雪があはった樹間を進んで行くと、すがくし朝の大が射し込んで来て、はれやかな気分になれた。今日も展望はよく、赤石・荒川、聖心、つた南ア南部の山々が昨日よりも自然外に見えた。金峰山と五大岩も印象的を發揮して、いた。

大池小屋に帰つて未だら、二人のパートナーに出会つた。大が一鶴に遇た。その大は畠山から彼等に



ついて来てしまつたとのことであつた。
大池小屋を後に昨日歩んだ道を逆モどりした。これほどトレースがはつきりしてゐるやう、ストップと輪カンを小屋に預けないで、甲武信まで歩き出すのだったとゆんだ。

金峰山からは行列を作るほどの混み不うだつた。小さなくずサックを肩に、写真機をぶら下けた連中が何人も／＼いた。そして連れの女の方をモデルにして一所然命に写真を撮つていた。どうせ撮るなら雪山でヌードでも撮ればよいのにと思つたら、思わずふき

出しあつた。こうした連中に
ヘヤエキしながわ、シリビードー
などに六じながわ降りて来た。便
士見峠に未だ時は、日はもうだい
ぶ傾いて、た。大日小屋のあたり
かうは雪どけのぐぢや／＼道だ
つた。雪にみがかれてされいにな
つて、いた靴に、泥は遠慮なく付い
た。それがいやだつた。小屋は超
満喫の盛況だった。

一月十五日くもり
御来迎を見ようと山丘前の尾根
を登つて、いつたが、一向に展望は
ひらけず、雪のため靴が硬々へコ
テコナになつてしまつたので帰
ることにした。泊り合せた連中は
その殆んどが瑞穂まゝ金峰へ行
つた。信州峠を越えて行こうと、
う粧狂な人は少なかつた。天生園
一黒森と伏説に広い上ラツフ道を
飛ばした。こゝは雪がもう少し横
つていればツアーコースとなりう
るでやう。黒森では獣師を沢山
見かけた。信州峠に着いたら目下
鹿狩りの真最中であつた。「もう
じき鹿が出ますから、早く行つて
下さい」とせき立てられて歩を早
めた。今日ほどんよりどくもつて
いて、寒々としたいやな日だ。益
地状の山あいの道を、思ひきり大
きな声で歌をうたつて歩いた。そ
れがつままして気持良かつた。蓮
々、ハケ岳が近々と見えた。

高穂の秋晚

彦昌 满



36. 10. 15. 17

高穂に乾き切った岩肌を
青空に浮び上らせた等
は、ほつと寒風のて徑
の美してました。

期待した新雪はちつ
すつかり消えてしまつ
てしました。要のあの
稚齿が嘘のようと思え
る程人気のない径を
落葉を踏みしめながら
機走へ向いました。や

公用で松本に出かけたついでに
一寸足りぬとして高穂に寄つて未
ました。槍・穂の報走をするつも
り、どうたのですが天候に恵まれず
、渓流から北穂を往復するだけで
帰つて来ましたが、期待した通り
の静かは秋の山の氣分を味うこ
とが出来ました。

登山としては別に報章する程の
ものではありませんので、いくつ
か印象に残つたことだけを記しま
しょう。

梓川に沿つて上高地に近づくに
つれ左目に展開される紅葉はマナ
ガに目も覚めるばかりでしたが、
やはり金トンネルをすぎ、大正池

はリ山は静かでありたいもの。黄
色くなつた葉をわずかに残した木
々の枝も、日暮ぐるしかつた夏を
過ぎてほつとした木々に秋の冷氣
が吹きこなつた。まさに秋の冷氣
の中にはひそやかに息づき、間もなく
深い雪に埋もれるのをじつと待
つてゐるふつむ感じでした。

松本で少し用を定してから来た
ので、横尾に着いたのは午后二時
頃でした。今日のうちに暗く冬つ
ても槍の肩まで行つておこうかと
も思いましたが、どうも天気が崩
れとうなので迷つた末、横尾に泊
ることにしました。

翌日朝の茶、今にも降りそうな
空の下計画を実現して渓流へ向い
ました。紅葉の枝越しに見えた屏風
岩は、一見違うといふ氣もなく鮮

めれば一美しいものです。然し
渓流のカールはうと陰氣ですまし
た。雪の消えた動々としたカール
の底に、ボソボソと取り残された
ようにテントが散らばり、霧に漏
れ、凡にバタバタとあわられてい
るさまは、「山男どもの夢のあと
」とでも言いたい所でした。

残るともなしに、いつの間にか
脇を濡つすほどのかじ永雨の中
を南校を辿つて北穂の小屋へ登り
ました。

冬山の荷上げで登つて来た大学
の連中が又下つていった後、小屋
は再び私達と小屋番だけの静けさ
に戻りました。所在なく北穂の
頂でぼんやり坐つてみると、永雨
はいつの間にか雪に變り、我々は
今冬度目の穂高新雪の収集を



受けたわけです。

その後、五、六人の同宿者が來
ました。みな若者でした。静かな人
達でしたが、こう、うう静かな山に
来れば皆、うなるのでしようか。
雪になると、どうも暖かい
と思つて、翌朝自殺をさまし
てみると激しい風雨になつていま
した。

かくて再び風雨の中を南校を下
ることになつたのですが、途中流
水のため地盤がゆるんでの落石に
は一寸緊張させられました。それ
から、来るときにはあんなにおだ
やかに見えた屏風岩が、帰りには
あのルンゼに白い太柱のような
塊をかけ、ゴウゴウと悪寒のよう
に怒つて、いるのに身のうちも思
いました。

とりとめのない起行文に手つて
しまいましたが、秋の穂高のム
ードの一端をお伝えできれば幸
いです。

一の正月休みにも山に登つた。一旦腰を下してしまふと根が生えてしまふよつて荷物を背負つて、深い雪の山径を畠登して、よつよう踏み固めた雪の台地に三張の大幕を張つた最初の晩から、山は切れ目のない雪に覆つた。

それでも毎朝、まわり待ちの食事当番は夜中の一時頃には起き出して炊事にかかる。テントはすっぽりと雪の中に埋まり、キャップライトの光の輪の中では無情に激しく雪が舞う。水が十秒と空たないうちに凍るよつなどつてつく酷寒の中で、身体と氣持だけはキリりと伸びる。

夜が明けると、トレーニングを兼ねて文替で雪道のラツセルに行く。五〇メートルも登れば疲れて動けなくなるよつよ、フカンをはいても腰までぐるる雪のラツセル。森林限界を抜けければ、その先は日もあけてはいられない激しい吹雪だ。翌日になれば前日のラツセルの跡も消えて、また同じ作業の様り返し。「このまゝの状態では今回は山頂まで辿りつけないかも知れない」と思つても、昏んなぞんなどには屈託しない。ラツセルが道づくりが現在の僕等に与えられた。

ついテントの中では、もう何もやることはない。ローソクのあかりを囲んで、せめてもの正月気分とアルコールをあけて下すな歌を歌つて寝るだけだ。ラジオが山の道難を伝えて来る。人ごどじやドナルドを連れてつづつかりすれば通常にやられる。

そんな練習が続いた三日目の晩、雪は止まないが、今まで無風

れた課題なのだ。

やることはない。ローソクのあかりを囲んで、せめてもの正月気分

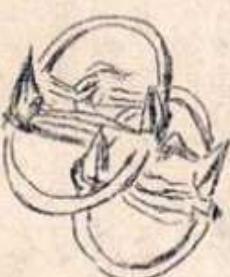
といつても、この雪では俺達だけだ。

人ごどじやドナルドが山の道難を伝えて来る。人ごどじやドナルドを連れてつづつかりすれば通常にやられる。

そんな練習が続いた三日目の晩、雪は止まないが、今まで無風

といつても、この雪では俺達だけだ。

人ごどじやドナルドが山の道難を伝えて来る。人ごどじやドナルドを連れてつづつかりすれば通常にやられる。



何年もの間、登ろうと思ひながら

口

なものが

口

付

付

付

付

付

付

さ込んで来た。「あしたは晴れる

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

さくわれて来た山カンである。日

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

程のせまつた明日は、頂上まで一

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

壁を、ようく二日がかりで登り

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

終えたとたんに、涙がぽろりと

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

あふれて来て困つたことがちつた

口

だ

だ

付

付

付

付

付

付

(辻勝四郎)

浦和渓穂山岳会々則

- (オ一章) 名称及び所在地
オ一系 本会は浦和渓穂山岳会と称し事務所を浦和市内にある。
- (オ二章) 会員
オ二系 本会はオ二十一系により認められたものをもつて会員とする。
- (オ三章) 目的及び事業
オ三系 本会の目的及び事業は次のどおりである。
一、会員相互の親睦
二、登山技術及び山に関する研究
三、本会の母胎である浦市高山岳部との連絡及び協力
四、技術私及び関係出版物の発行
五、遭難予防及び対策
六、その他本会の目的達成に必要な事業
- (オ四章) 役員
オ四系 本会に次の役員をおく。会長は終会で行う。
会長一名、会計一名、庶務一名、会報係一名、装備係一名
蓮葉村米谷貞二名
- 会長は会を代表し、会務を総理する。
- 会計は会の会計事務に当る。
- 庶務は会の庶務記録に当る。
- 会報係は会報の発行に当る。
- 装備係は会の共同器具の購入、保管に当る。
- 蓮葉村米谷貞二名は会の遭難予防及び対策に当る。
- 役員の任期は一年とし、更任を妨げない。
- (オ五章) 会議
オ五系 本会の会議は委員、役員会、山語会とする。

オ十三系 総会は毎年一回これを開く。但し会長の要請あるときは、隨時これを開くことができる。

オ十四系 役員会は必要あるとき隨時これを開く。

オ十五系 山語会（定期集会）は原則として月一回以上これを開く。

オ十六系 会議は会員の過半数をもつて成立し、その議事は出席者の過半数をもつて定める。

(オ七章) 会計
オ十七系 本会の会費は会員の納入する会員及びその他の収入をもつてこれに当てる。

オ十八系 会費は月額百五十円とする。入会金は二百円とする。

オ十九系 会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十日までとする。

オ二十系 会費は月額百五十円とする。入会金は二百円とする。

オ二十一系 会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十日までとする。

オ二十二系 (オ七章) 入会及び脱会

本会への入会及び脱会は所定の手続を経るものとする。

会員の入会は、役員会の審査の上決定する。

左の項目の一に該当する者は、役員会の協議の上除名し、会長はこれを全会員に報告する。

一、本会の目的に反する行為のあつた者
二、会費を無断で六ヶ月以上滞納の者

三、集会に四回以上連続欠席で欠席した者

四、年間の会山行（会員二名以上の参加で、会に計画報告のあつたもの）への参加が二回未満の者

(オ八章) 会則の改廃

オ二十三系 本会則の改廃は総会において出席者の三分の二以上の同意を必要とする。

付 則
オ二十四系 二の会則は昭和三十八年四月一日より実施する。

編集
後記



名条件をつづり、クオニの山県
が会長さんにおこなったのでは、
引き締めの七日目になりそうだ。

本号では、時期的・関係やウケ
報係の怠慢など、いくつかの原
稿を割愛させて、いたしました。
いづれ収録していくつもりですが
で御容赦ねがいます。

スレ振りの「決裂」である。オ
十二号は元々されたのが35年9月

であるから指揮りかせてその間二年と六ヶ月。会報係も良くもまあ堂々とサボリ続けたものだ。

本号は内容・体裁とも万能未満の出来である。記録もまた破めて、いた古いものばかりである。だが本号はあざいに内容は向わない二つにしほう。現在の我々にとつて大事なことは、まず会報を出すといふこと・会報の存在を万能のが認

早いもので当会も創立以来今年
で七年目を迎える。結婚生活をう
さしづめ、七周年の浮気^クといつ
たどりうだが、会則を整理し、除

呴済、われりがアライア
福山正教君が二月Y.M.C.A
の教会において華々しく聖餐の
典を挙げました。クリスチヤン
でもない本人の弁へ教會なり安

神さんがどうくオトワソ
になりました。どうで先生
の二こう々山ノ神。の軍門に下
つてあとまし、ようですが、ピ
ツケルやドタ靴の買い子を探レ
ているのはいたづけまじん。

も、運営の面において組合活動と山岳会活動の何と類似矣の多いことか。

「それセレ、こゝへか旧聞に風します
が、『岳人』一六五号（冬山寺大号）
に、江勝四郎・上川武尊山の案内
を發表。同じく『岳人』一七一年
（劍の石場狩集）に山崎弘一・早
月尾根毛勝谷の登はん記録を観
察。これにしても互いに二の所
々書くこという習慣から遠ざかっ
てしまつたものだ。」

年度替りの役所の仕事、迷季の
からんだ労組の仕事の目の回るよ
うな忙がして。——そんな黒味乾
燥な生活の様り返しの中で、ふつ
と奥を抜いてみると、あたりはも
う新緑の季節。今年はどこかの山
の奥でのんびり腰を落ちつけて新
緑でも眺めて、いふことにするか。
いやとうじやない。今年は北岳バ
ットレスをやつて、夏には昇日の中
央カンテをもりくと登つて、
夢だけが先に走る！

(过
肠
四
郎)

発行日 昭和三十八年四月二十日
発行所 浦和美桜山岳会
(浦和市高砂町五
才十三号)

ノ八九

浦和溪稜山岳会

浦和市高砂町5-89